

『維摩經』の二種菩薩

梅 田 愛 子

1. 序論

『維摩經』に描かれる菩薩の定義は多種多様であるが、そのような菩薩の多様性を具体的に考察した先行研究はなく、『維摩經』の菩薩思想についての研究¹⁾も若干あるのみで、それらの先行研究も考察の中心は菩薩としての維摩である。そこで、本稿では『維摩經』に説かれる娑婆世界の菩薩の二種、すなわち「初行の菩薩」と「深遠な〔經典を〕志向する菩薩」に着目し、これらと初期大乘期に見られた四種菩薩、すなわち、①「初発心」②「久修習」③「不退転」④「一生補処」の菩薩の四位²⁾との関係を考察し、そこから『維摩經』が、空を基調とする教義的論拠以外にも大乘が起こった系譜を踏まえていること、「不退転位」を重視し、修行道に重きを置いた教理の展開や構想の可能性を持つことを提示したい。

2. 娑婆世界の菩薩の二型

維摩は娑婆世界の在家居士であるが、妙喜世界の阿閼如来のもとからやってきた他世界からの菩薩でもあるので、その立ち位置は特殊である。佐藤〔2004: 33-34〕によると、『阿閼仏国經』で描かれる妙喜世界の菩薩たちは無上正等覚を覚えない間に、あらゆる場所においても仏国土から仏国土に赴き、あらゆる場所においても諸仏世尊と諸菩薩と仏弟子から離れないはずであり、彼らがどんな世界から死に変わろうとも、阿閼仏国土に生まれた、あるいは生まれる、あるいは生まれるであろう菩薩全ては無上正等覚に決定しており、無上正等覚をさとしていない間に仏国土から仏国土へ赴くとされ、また妙喜世界の菩薩は、娑婆世界の授記された菩薩や無生法忍を得た菩薩と等しいことが説かれる。このような『阿閼仏国經』の菩薩像を踏まえれば、阿閼仏国土から生まれ変わってきた維摩は、授記された菩薩であり無生法忍を得た菩薩であり、無生法忍は不退転菩薩の特性でもあるから、つまり維摩は不退転以上の菩薩であり、その描写から仏になる一歩手

前の極めて高位の菩薩である。

その他にも、サハー世界において通常、菩薩を妨げ対極的な存在であるマーラ（魔）なども、実は菩薩であると経は定義づける。

（V-20）大徳マハーカーシャパよ、十方において、無数の世界において、何人のマーラ（悪魔）たちが悪事をなしている⁶⁾としても、彼らすべてが、それどころか、不可思議という解脱に立脚している菩薩たちであり、方便の巧みさによって、衆生を成熟させるために、悪事をなしている。大徳マハーカーシャパよ、十方において、無数の世界において、菩薩たちが、何人の懇願する者たちによって、乞われているとしても…（中略）…かの懇願する者たちすべては、それどころか、不可思議という解脱に立脚する菩薩たちであり、方便の巧みさによって、この堅い決意というものを示している。³⁾

これは『小品般若經』初品第一の教説で、般若波羅蜜において修行する菩薩は、菩薩という名称にさえ執られず”にあることと、“魔の所行（pāpa-karman）による驚怖沒退という怖畏に墮落せず、不驚不怖不沒不退であるならば不退転の菩薩であることが示される。”（ともに、勝崎 [1994: 567 上]）これを受けて、『維摩經』では更に「菩薩でないものが、菩薩の圧迫に耐えることはできない」としているが、それは不可思議という解脱に立脚しているマーラ（魔）たちが、実は“菩薩という名称さえ捨てた菩薩”と位置付けられているからではないだろうか。そして、彼らの圧迫に耐えられることが、不退転位の菩薩であることの一つの指標として考えられていたのであろう。

さて、娑婆世界における菩薩の型（mudrā）について、次の二種が説かれることに注目したい。①さまざまな句や文を信じる型（vicitrapadavyaṅjanaprasādamudrā）＝初行の菩薩（ādikarmika-bodhisatva-）と②甚深なる法の原理を恐れず如実に趣入することに悟入する型（gambhīradharmanayānutrāsasayathābhūtāvātārapraveśamudrā）＝長く梵行を行じている菩薩（cīracaritabrahmacaryā-bodhisatva-）である。『維摩經』ではこの二型の特徴と自らを損なう原因⁴⁾が説かれ、大乘初期の菩薩の四階位中、特に最初の二位が強調されているが、これは四階位の過渡期というわけではなく、はじめに登場してくるのは「新学（初発心）」と「阿惟越致（不退転）」であって⁵⁾、その後「久修習」や「一生補処」が想定されてくるので、ここで初めの二位が強調されている時点で、菩薩の四種は知られていた。実際、経中に「一生補処 ekajātīpratibaddha-⁶⁾」や「不退転 avaivartika-⁷⁾、avinivartana-⁸⁾」の語も登場する。そもそも、大乘仏教においても、菩薩の修行の到達度を段階的に示す「階位（地）」の考え方が次第に発展していった⁹⁾が、その最初期のものが小品系の般若経で説

かれる菩薩の四階位であるが、こうした見方には問題がないわけではない¹⁰⁾。先行研究¹¹⁾によると、小品系般若経において上記の四種菩薩のうち不退転を除く三種は未だ階位として確立されておらず、大品系の般若経において、残りの三種も階位(niyāma-, bhūmi-)として位置づけられた。つまり“四種菩薩のうち「bhūmi-」に相当する語が共に用いられているのは「不退転」のみ¹²⁾”であり、“小品系の四種菩薩を位置づけなおすならば、それらは(中略)不退転の階位との距離を示すものだったと考えられる¹³⁾”と報告している。これらの点を踏まえて『維摩経』を読むと、経中に「bodhisatva-niyāma-」や「bodhisatva-bhūmi-」の語は無く、前者は「niyāmāvakrānti- (正定聚)」の語(意)で、III-50/IV-20/VII-3に現れるのみであり、後者は、基本的にVI-7に普通名詞としての「bhūmi-」が現れるだけである。但し、III-49には、マイトレーヤ(弥勒)が「avaivartyām bhūmim (不退転の地位について)」説いている際、維摩がやってきて一生補処や菩提について論じた話が出てくる。『維摩経』でも「bhūmi-」の語と結び付いているのは不退転だけである。また、菩薩の二型について「mudrā-」という語を用いて述べているのも、不退転を除く他の三種がまだ階位としてはっきりと結びつけられていなかった証拠であろう。

3. 結論

『維摩経』に説かれている菩薩の二型に着目することによって、『般若経』発展の中での『維摩経』の立ち位置を示す一つの論拠を提示できたと思う。そして、これら二種が特に言及される理由について考察するに、大乘の最初期から先ず不退転が目指されるべき到達点であり指標だったので、まだ退転してしまうおそれのある初めの二位について十分に教化する必要があったのだろう。そのような現実的な志向が中心にあり、ある意味非現実的な維摩の特異性・超人的な菩薩の理想像が描かれるのも、またマールなどさえ菩薩と定義付けるのも、不二の思想を掲げる『維摩経』らしくもあるが、「不退転位」を重視した修行道を推進する方便¹⁴⁾とも取れるのである。

1) 大鹿 [1988], 西野 [2007]. 2) 梵語や訳語にヴァリエーション有り。① prathamacittotpādika- (prathamayānasamprasthita-, navayānasamprasthita-, ādikarmika-, 「新学, 新発意, 初住大乘」など.) ② cirayānasamprasthita- (yogacāra-, caritāvin-, 「大久遠, 久衆道, 行六波羅蜜」など.) ③ avinivartanīya- (avaivartika- 「阿惟越致」など.) ④ ekajāti- pratibaddha- (abhiṣeka- 「阿惟顔」など.). 3) 原文は大正大学総合佛教研究所 梵語佛典研究会 [2006:

62-63]. 4) 『八千頌般若』の第7章で、何百千もの仏陀のもとで梵行を長く行っていても、この智慧の完成（般若経）に誠信を置かず、傾倒せず、自分の精神を害し（*svasaṃtāna-upahatya*）他をも害して、地獄へ落ちるような行為を蓄積すると説かれていることと通じるものがある。5) 岸 [1976: 668下]。6) 例えば、III-50やX-6。7) 例えば、III-23やXII-14。8) III-56。9) 平川 [1965: 733-734]によると、マハーヴァスツの中に保存されている十地説は、部派仏教の中で考えられた仏陀の前世としての菩薩であり、すでに成仏した仏陀の前世を逆観して考察されている菩薩であるので、同じ菩薩という用語を用いながらも、般若経などで説かれるそれとは、意味内容的に本質的な違いがあるとしている。10) 鈴木 [2018: 269]。11) 小沢 [1985]、鈴木 [2018]。12) 鈴木 [2018: 271]。13) 鈴木 [2018: 272]。14) IV-16では、方便に摂取されない般若は束縛であり、般若に摂取されない方便も束縛であることが説かれる。

〈参考文献〉

- 大鹿実秋 1988『維摩経の研究』平楽寺書店。
 小沢憲珠 1985「般若経における菩薩地と菩薩位」『印仏研』34(1): 154-159。
 勝崎裕彦 1994「小品般若経の菩薩の階位」『印仏研』42(2): 565-569。
 岸一英 1976「小品般若経における菩薩の階位の発達」『印仏研』24(2): 668-669。
 佐藤直実 2004「阿閼仏国土の声聞と菩薩の修行」『種智院大学研究紀要』5: 25-38。
 鈴木健太 2018「大品系般若経における四種菩薩について」『北海道武蔵女子短期大学紀要』50: 269-285。
 大正大学総合佛教研究所 梵語佛典研究会編 2006『梵文維摩経——ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂——』大正大学出版会。
 高橋尚夫・西野翠 2011『梵文和訳維摩経』春秋社。
 西野翠 2007「『維摩経』における菩薩思想について——その内容と思想発展史的的位置づけ——」『印仏研』55(2): 909-906。
 平川彰 1965「地の思想の発達と三乘共通の十地」『印仏研』13(2): 733-753。
 Nishi Yasuo and Ousaka Yumi. 2017. *Vimalakīrtinirdeśa: Word Index, Reverse Word Index with Metrical Analysis*. Chuo Academic Research Institute.

〈キーワード〉『維摩経』、菩薩思想、菩薩の階位

（東洋大学大学院）